

平安時代の前期に、道雄僧都が創建したと伝えられる海印寺は、かつては広大な寺域に大規模な堂塔伽藍を誇っていたと考えられています。現在ではその子院の一つである寂照院がわずかに残るのみです。

この寂照院境内の発掘調査で、江戸時代初めごろの土葬墓群が見つかりました。今から10年ほど前のことです。本堂裏の平坦にされた高台の上に土葬墓群は営まれていましたが、この場所にはかつて古い墓碑が数多くあったといわれています。土葬墓は、1メートルほどの間隔で4基が近

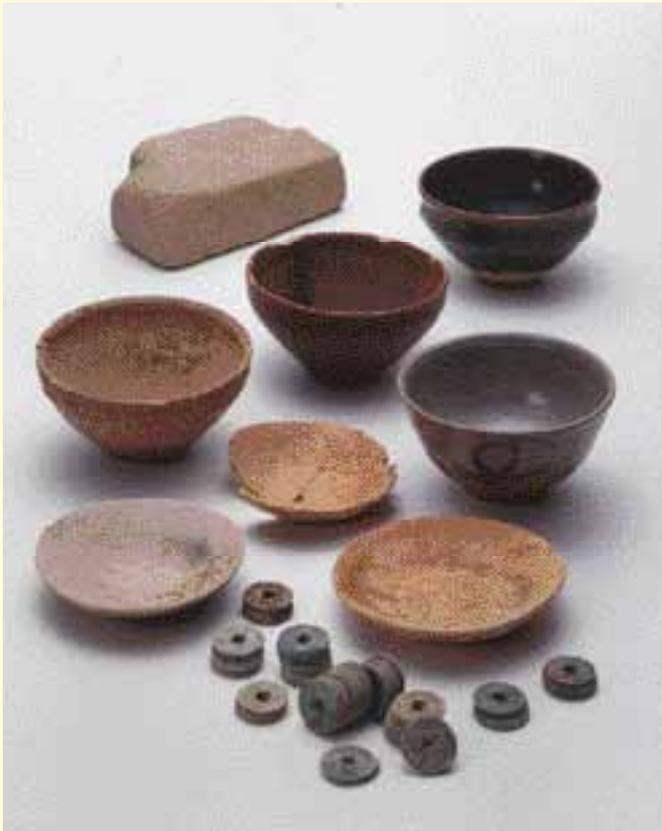
接して並んでいました。いずれも、一辺が1・5メートルほどの四角い穴の中に死者を座らせた姿勢で埋葬した「坐棺」と考えられるものです。鉄釘の出土するものがあることから、棺は箱型に組み合わせたものであったと想像されます。

各土葬墓には、死者に供えられた副葬品が残っていました。副葬品は、陶器の椀と銭貨を組み合わせたものが基本で、それに土師器の小皿や砥石が加わる程度のもです。

陶器の椀には、美濃焼きの天目茶椀が1点と唐津焼きの茶椀が3点ありました。そのいずれもが、現在においても十分使用に耐えうる優品で、死者が生前に所有したものと思われます。

銭貨は、中国の宋代に製造された渡来銭ばかりで、6枚1組になったものが3例あるほか、75枚もの多くを束にしたものが1例ありました。この6枚1組の銭貨は、いわゆる「三途の川の渡し賃」と総称される六道銭に相当するようで、こうした習俗は今日の葬送儀礼にも長く生き続けます。

(財長岡京市埋蔵文化財センター)



▲土葬墓群の副葬品